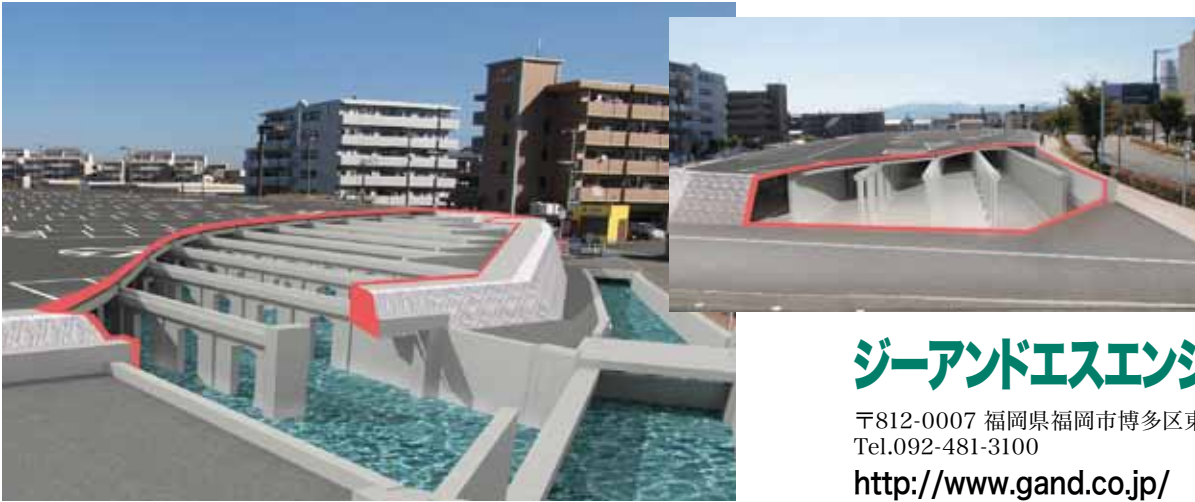


「小倉第2雨水貯留施設」の完成イメージ図



## ジーアンドエスエンジニアリング

〒812-0007 福岡県福岡市博多区東比恵3-24-9

Tel.092-481-3100

<http://www.gand.co.jp/>

# 東京都建設局から「異例」の3年連続の表彰を受ける 「自然災害」から大切なものを守る強い使命感で 信頼される提案力と技術力を磨く

### 春日市の小倉第2雨水貯留施設の設計を受注



児玉和久 社長

道路や河川、橋梁などの構造物の設計を通じて、社会インフラの維持・管理を企業使命とする建設コンサルタントのジーアンドエスエンジニアリング（福岡市、児玉和久社長）。九州と関東圏に営業拠点を構え、特に関東圏では高い技術力が評価され、2013年度から異例の3年連続となる東京都建設局の局長賞を受賞している。児玉社長は「誰もやったことがないことに価値がある」とし、従来の枠組みに捉われない、新たな技術への挑戦で未来を切り開く考えた。

て実績を重ねてきた。

4月に発生した熊本地震では、改めて自然災害の脅威から身を守ることに難しさを実感させられたといえるが、いつ何時、どんな形で襲ってくるのかわからない自然災害から大切なものを守るための備えは万全を期す必要がある。ジーアンドエスエンジニアリングは長年、重要な社会インフラである道路や橋梁などの構造物の調査、設計業務を中心とした建設コンサルタントとして、官公庁から仕事を直接請け負う元請け事業者として

建設コンサルタントは実際に工事を請け負うゼネコンとは違い、実際の工事を行うわけではない。発注者である官庁や地方自治体からゼロベースのアイデア段階から相談を受け、「技術パートナー」として専門的なアドバイスをを行うことからスタートする。当然、この段階では費用は発生しないが、綿密な調査や想定されるシミュレーションなど、設計に関するかなり突っ込んだ部分まで、役所と二人三脚で企画アイデアを具現化していく。ただ、この企画アイデアを仕事として受注できるかどうかは別問題で、そこは入札に掛けられ落札できた事業者が設計を行うことになる。

同社は近年、福岡市内を流れる御笠川が氾濫し、博多駅周辺が水没したことを受け建設された「山王公園雨水調整池」の設計業

務を請け負った。地下神殿のような空間をテレビなどで目にした人もいると思うが、水害の脅威から都市機能を守るために同調整池を設計した同社のこの実績がきっかけとなって、ことし5月福岡県春日市に完成した「小倉第2雨水貯留施設」の設計業務を手掛けた。このケースではアイデアベースのところから同社が春日市の要請に協力する形で進められたもので、実際の入札でも同社が無事に落札できた。

同施設は、たびたび大雨時の浸水被害に悩まされていた市内の日の出町地区にある「春日市ふれあい文化センター」の駐車場地下に雨水貯留施設を建設したもので、25層プール25杯分の約1万5000トの水を貯留できる。総事業費は10億3600万円の大きな工事となったが、この貯留施設の完成により、1時間に70ミリ程度の雨なら、地下貯留施設に水のため、浸水被害が軽減できる。ゲリラ豪雨のような時でも浸水被害を抑えられるものとして地元では期待されている。

また、施設の特徴としては、水がたまる自然排水できる仕組みとなっており、維持管理コストを

抑えた点にある。

児玉社長は「企画段階から協力していた案件でありぜひ当社で受注したいと思っていた。自然災害の脅威がクローズアップされる中、創意工夫を凝らした防災施設を手掛けることができ、住民の大切な生活を守る使命感のある仕事だと改めて実感した。他の自治体などでも検討しているところがあれば、積極的にお声かけいただきたい」と話している。

### 全九州と関東圏に営業拠点 関東圏では高評価受ける

同社は1973年に設立され、地場大手の建設コンサルタントとして九州全域と関東圏に拠点を構え、年間200件にも上るプロジェクトを受注している。特に関東圏では2013年、14年、15年度と3年連続で、東京都建設局から「建設局優良工事等表彰」を受賞し、3年連続という異例の快挙を達成した。

建設局優良工事等表彰は工事成績が優秀であり、または困難を克服し、創意工夫に努めるなどの成果が顕著であった工事に対して授与されるもので、15年度は「隅

田川(千住大橋地区)被覆設計(その4)及び防潮堤耐震対策詳細設計(その2)」が受賞した。

### 新卒採用に注力し若手に期待 「未知なる」事業領域を開拓へ

児玉社長が掲げる経営ビジョンは「誰もやることがないことにこそやる価値がある」。同社は昨年、福岡県発注の「移動式水素ステーション」の設計を請け負った。一般的に考えれば、道路や橋梁などの構造物の設計を請け負っている建設コンサルが手を出せる仕事ではない。社内でも賛否両論あつたものの、「新しい技術へのチャレンジこそ未来に向けた成長のステップとなる」(児玉社長)と決断。同社に新たな扉を開く実績となった。

児玉社長は「今、当社に必要なのは従来の枠組みに捉われない発想力と行動力。前を向いて果敢に挑戦できる若い人材を確保するため、新卒の採用活動に力を

入れている。10年、20年後の成長のカギを握るのは若い人材力だ」と話し、製造業が生産設備の増強のために投資するように、「当社は人材に投資する」と力を込める。そうした若手人材を活用するため同社が、次のチャレンジと位置付けているのが「農業土木」への参入だ。かつては工事量も多かった農業土木分野だが、近年は農業の落ち込みとともに工事量も減り、各地の農林事務所が組織統合されるなどの動きも目立っている。一見すると仕事量が見込めない分野にも見えるが、児玉社長は「今だからこそやる価値がある。技術・ノウハウを継承し将来に備えない」と話し、誰もやりたがらないことに価値を見いだしたともいえる。チャレンジにも注目が集まる。



15年度に受賞した隅田川(千住大橋地区)被覆設計(その4)及び防潮堤耐震対策詳細設計(その2)